



繪本在原草

卷之三

13  
2549  
5-3





2549  
5-3

復讐 信夫摺在原草帝卷三

浪華

中川昌房著述

東都

感和亭鬼武校合

業平拜鈴鹿明神  
恐摺遁鬼窟逢灵

勢如龍虎... 怯よ、片山乃社社... 書をそと免了地の社... 了を社白風元年よりけ... たる市神あり... せたまひ... 改又六乃山... 年を越... 系東



大正九年三月二十四日  
磯貝謝昇

在原草帝卷三



由趣まゝ名席が候も圓(む)味方終事終いふご全が  
 ぶまば上落して轡をを運見んこもあつて我ふの  
 國々へと能く結結所か護をわのむらりて一徑を  
 西より東へは終る所(は)はも糸路を以て近なる供の  
 用意せしめて仰出さすに千方(は)けず、宜しくかざり里  
 百(は)おしも論言如汗か(は)しきもの思まはるるに遠  
 眷属(は)中付終固を十(は)ふかまゝ親王の御與(は)學(は)終  
 なる、終鹿終社(は)趣あふけ時業平(は)は、是(は)思終を  
 男終ぬく出たせ白丁(は)鳥帽子(は)眉深(は)かひき而供(は)乃  
 肉(は)まき色終あ(は)を思ひ、山中(は)を遁出んと計に  
 あり千方(は)岩窟(は)留まるる、凡鬼(は)陰(は)鬼守(は)護(は)の為(は)

而供(は)も社(は)系(は)不及(は)び、人(は)の思(は)を思(は)せし  
 事(は)も、而供(は)の女中(は)も、終(は)しき(は)ふ(は)ら(は)び(は)を  
 ころめま(は)り、終(は)前(は)へ(は)も、智(は)の言(は)楽(は)を(は)供(は)  
 時刻(は)を(は)い、漸(は)其(は)香(は)及(は)て、還(は)幸(は)は、(は)中(は)の  
 たる色(は)、樹(は)木(は)終(は)陰(は)も(は)終(は)ら(は)り、而(は)彼(は)と(は)終(は)り(は)か(は)る  
 時(は)思(は)終(は)す(は)きを(は)見(は)合(は)せ、而(は)供(は)の肉(は)を(は)の(は)ご(は)と(は)終(は)る(は)終(は)の(は)こ(は)  
 走(は)り、而(は)終(は)り(は)終(は)り(は)や(は)終(は)ら(は)る(は)追(は)人(は)乃(は)者(は)や(は)ら(は)る(は)  
 注(は)本(は)一(は)は(は)終(は)り(は)て、道(は)も(は)き(は)山路(は)を(は)た(は)る(は)終(は)り(は)終(は)り(は)終(は)り(は)  
 左(は)ふ(は)き(は)終(は)る(は)山路(は)日(は)暮(は)る(は)ら(は)る(は)終(は)り(は)終(は)り(は)終(は)り(は)終(は)り(は)  
 若(は)終(は)女(は)乃(は)身(は)も(は)方(は)角(は)へ(は)定(は)る(は)ら(は)る(は)終(は)り(は)終(は)り(は)終(は)り(は)終(は)り(は)  
 石(は)を(は)終(は)り(は)終(は)り(は)終(は)り(は)終(は)り(は)終(は)り(は)終(は)り(は)終(は)り(は)終(は)り(は)終(は)り(は)









悪徳山中うて  
陸真の霊よ

あま



石原草子巻三







上の道まうなほなまふなりんと其大執後まはらひて後身  
 山をりりやうまふして終るゝ修め終るゝをあらうりもあはれ  
 奥に死して日数を経るゝつゞも其灵魂け世を去るゝを  
 りりい妹が九死てまの時は陰人ご冥をあらうり〜彼が  
 名をすゝをすゝい程又のまを以て我仇千方と討えん  
 其後離を君抱えれ〜趣意不謂こは千方か滅亡世に  
 その身の傍要なりといつゞも君抱が誓い乃細き首と後  
 〆〆〆つゞ降與が熱念のちせ〜亦此書終五純奉まを  
 閱て知事な〜志ふな〜折てまのふ抱ハ千辛萬苦を  
 暖ぎ〜ややく大和國石上る来を紀有常が宿を  
 たづの井筒姫よこの〜を告り〜ゆ人井筒姫よこもま

幼〜之〜も才智凡人を〜とおのゆけ賢女よもバむその  
 其君抱を將〜業平の彼より〜おの子足立は蘭平と  
 〆〆〆考〜け多を告〜一初もあ〜ゆ逆いよ趣〜と  
 〆〆〆あ〜らふ足立蘭平恋を〜しい健ちも若考を  
 〆〆〆バ〜ゆ〜い〜〜とね〜若君よ〜と國が岳よお〜すり〜や  
 我先年より〜取〜方〜と〜ゆ〜け〜る〜ぬ〜な〜ま〜も〜名席が  
 〆〆〆清もま〜は〜若君乃あ〜吾も君抱中もた〜り〜み〜  
 〆〆〆を〜く〜市母らよ〜然い上國〜を〜白〜く〜ゆ〜を〜は〜る〜ぬ  
 〆〆〆求〜ん〜よ〜い〜い〜今日只今法を〜家と〜水と〜ら〜こ〜は〜し  
 〆〆〆く〜恐〜抱〜後〜ハ〜乃〜案内〜の〜為〜は〜い〜し〜〜ま〜〜し〜  
 女中た〜ら〜は〜某が〜同〜は〜せ〜も〜よ〜ら〜か〜ら〜む〜ゆ〜し〜〜い〜







妻より市仇あつらんまなうけに神うへにたぢ申うち人うあや  
 しめらるゝまの山崎をかへせうとて機の子はあふふ  
 津島をいひくひくせ管地小笠を控ひあせ旅の親  
 子が曼佛堂社を呪おもる体うね強ひふ脊ふ負ま  
 いせ思物ふいゝま乞して宙をかあけく榮平ハ伴  
 だ路をさして走りま無伴り地若若を是ハ峽岨難  
 西に嫌ひもあゝ思物がおへ一方をいふ乃目あふん  
 海く分け入り三國岳をく到りいふ乃目あふん  
 業平ハ山に控れ背をこゝさんあふ小笠持して控へ  
 とらるせまひゆへ千方ハこれをおり同鬼隠が鬼を  
 佛機より付小楯二十個をうりおむきておせまひ

けきき  
 系をくらし起ぬ又幕をおせ爰拍しき並へ糸高  
 小井筒あちうしてけし彼あう酒家と控へて小  
 楯も何れも後ハ破れ又あど唄ひの舞ひ川流を  
 忘るゝ想ひたもむ性根をまひ居りしが業平  
 心とせらるをあけまひくま地志げこりこの本末を  
 神ひ小笠を射たりてたのしむいそへに林鹿の方  
 十町本もりにもふを佛依乃若もハ酒興ハ性根を  
 うらまて肝腎地親まハ何あへりをまひやまをも  
 知らるふ藤うたう想ひ居りかまゝの業平ハ  
 山乃上うゝ人高控中へいし見習めまていあかり  
 せんし親弟本控陰まかま井筒姫を個ハ作技を





五原野



在野草

井筒姐  
 豆立系平  
 菜平を  
 三國岳  
 つる



かろく 従も山をよるまゝの 杉せぬ 湯や 涼しくも  
 業平 自らゆくこれを見たすけ 山中へ 行つて 世の  
 人 従来するまゝの 山をよるまゝの 杉せぬ 湯や 涼しくも  
 西へ 越る 旅人 かりを 定めて 父母の後より 来りし 昔の  
 さし しの の たまの 娘はいを せり 又まが ちや 過ぎけし 年  
 強て 久しき 業平 ひと ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき  
 筒 姫を 侍りて 走らせし ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき  
 ひよ ねが ぬきこ ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき  
 その 内なる 母事 小末人 したまふ 湯と ちよき ちよき ちよき ちよき  
 と 又 懐き 業平 此 ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき

一首乃初歌よ

けく 井筒 法師 ふるも かの 道は りが なる ありま 道  
 妹 ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき  
 るも 湯を いち ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき  
 る 湯に じぬき ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき  
 後 ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき  
 女 兼百人 ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき  
 せま ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき  
 見え ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき  
 て ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき  
 を ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき



二かきあせしがむらかまのいそげども年増もゆく路  
 うらぬ姫天なるは峻しき路はたゆて道そのゆく  
 ささばなふさるかこふやあらしたる。歩の雨  
 又後より大勢はあつて親王をうむひゆあはる  
 退とくよ生捕よのしふ物をもハ一ち申し業年も  
 死ぐ申して何程の事は人たるとも捨切うて  
 遁ま出んと獨刀を引ぬくを業年止めのなひやよ  
 ちうく大勢かき来りたはバゆ一個も何進這を  
 切ぬあんこの進ふとさうせうし皆くまふせおはる  
 まふ同鬼隠形鬼乃あ個まり先ふ出まは業年  
 おろろ色ちうく切先ふまひいふゆめらたふさき

けいさばくしまの怪高親王たりは阿保親王は  
 別ふ在東の業年ふ我しなり先年名席千方を味  
 於に隠へん斗畧を家を以て親王たりと欺きしなり  
 志うふふと控へし詮ゆ我を捕へて迷もせまは  
 ん其上千方何程の進意を振ふともを業年  
 軍を以てせ免れんといふて敵をうてかたふべき  
 迷ふ降糸して命を全くすは肝要なり  
 何れは作は両鬼を以てけ年月千方の不知は  
 何れを志して子あつてをばは次鬼神の身  
 此は勅命なりとも男ゆべは  
 たりて其世を蒙るべし迷ふ山を歸らせり







業平くさぬくたぐい鬼神もせよ夢天の下王土  
まづいづかきこたわいをり物所なごいり日月の  
市つ付を海ぬくまき

古も本も我大君乃國なまは竹か鬼の伝家事  
べきしやふ海にたまんばさしも身道のりあた  
け一首胸をつぬき肝よこころそんは次互に歌をえ  
りしせまよこころりたりこの上はる只今より千  
方心を頼ま他國も走る朝歌乃花を免せんや  
栗よつら記の又さしもつらとありいり又山中  
を何ふもたし出まぬまふ古今原乃序は和  
おひ鬼神をも感ぜむとあまは是東の歌をつたよ

らん業平まはるあやのき場を一首の伝あまき  
ままぬがき本をよゆらせ給ひいれまは業平は伝より大  
神化現なりとも又い思ふ神は神傳も標しなるを  
かゝふあしきをふたしん

梅よりふけお神社考はなも本も本大矣乃玉は色  
もい何にけ紀左神はよゆらせ給ひいれまは業平は伝より大  
おま天智帝神市を思めて岡田氏紀納をを神傳にし  
て矣又しそ敵陣は射色しありいまけ書ふ業平  
神傳はくさあいつまは是なりん但し業平古あを  
吟じてる鬼を御傳をういりや

和歌集卷之三

三十一













高子姫をうらみんとし  
義氏の味方五郎の  
所より礼入  
返りて平  
大に悔く



ろを以てりむハ心若くくありありとめあつてそむく  
 乃つらつらむハ業平をりりく守護の者たのこおしむ  
 色ハ星進も世々又渡りていあかるば一密く又波中  
 堅固乃者急なるかなかきし海も移りてたすしむる  
 業平遂惑りる役目を兼りて中あつていびいでも  
 乃直まはたの事せはまふ養たるまは舞退せんも  
 上げ着ハ後氏の人ハ中畧たりとむむ付まふし  
 かしこまのちもかし市邊やて市前を退あふ及び  
 まより五葉の道の極をを撫せむふふあつて若き人  
 け迎をばはあむるも後まがう海をな及びいでも  
 扱むつりけりむををせりりむ君び入りてい

出しむんともあはれいさむをてゆいそ守護せ  
 ようの由取たるまは中將乃職たりとも若き人  
 翁を著し由取を堅固せんも城人の目よこりて  
 ろを登りつるせんさあぐむを若くはなすは  
 一由取たるまは門の極地たるむるも若き人  
 高後たるまはりこの由取のくむるも若き人  
 治の問あつてむるも若き人  
 一ふいめぬく業地のくむるも若き人  
 又内影たるまは若き人  
 何をやらんしうくくむるも若き人  
 平たりいづては若き人



梅美くたきいおあきくし一首を海にまき  
 人まつぬあゆし路終系さうしくさふあもあま  
 ちんよりくちをはあしと要持るあつうもあま  
 三橋氏の人の中畧よの業年ハ畧中乃美人と見と見る女を  
 おせまらり又高子の姫天年以由似合しく世は終せし  
 美婦人なるは取一而純少さよまきくはふあ通すく必登  
 かりまらうを入内させしは女所の市方まを殺せしは科  
 多き死罪もあさるべしして取ハ中いしはかり

さねも業年よに仮も入内きまきりし高子姫をよみみ  
 了がまきくはあはだきやうは海後の信を守りしは  
 夜の勤番高きま姫天乃市簾の肉くそは假初もよせ  
 けいしあもまは内回考を入まきく何ぶまきりしは  
 不取純極子まへを今ハけ中畧も出まらうしは  
 しかく曲考を乱入させ姫考を盗出せかくしおはまき  
 死して高子を品科まおしは姫考純兄達基経  
 仁國経はらうしはあはえはるあもも二年余人ハ  
 ばらも面侍をかくし海をやりし園純後をまらうしは  
 ま眼考をうくしはあまはまはまらうしは長月余の七日  
 しつあまをうりしを信しを海くこらうしは月さんもま



らぬ夜なりしふかの曲者も終るゝはををを圍んで  
 夜中もくちをくらりひの糸糸こつりたるやうにせよ  
 門をのりてつゝ紙をいれ戸をひらけやたつ  
 物も赤くはき身も入らんまけ拍子も洋家の  
 物も目を流しすを望城の押こしらん退まらぬ  
 して書侍も多かどかけぬくを返してさても  
 くの偏強の力老もを推してさてもさても  
 少中も今も防ぎくく市街の人々も解をさるる  
 くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 やけりすふも美屋も踏ぬく娘ををつとせよ  
 終るふ業平は市街の周地入りて押さるるを

バ射く落さんとすちちたすふ業平は紙の狼藉者か入  
 事うごあま退ちくくくくくくくくくくくく  
 物もくち力ぬきくくくくくくくくくくくく  
 くらたて火をちりし工細さうさくもあまはく  
 際ぐはる業平只ま個をまはるふあまはくくく  
 平はあまはくくくくくくくくくくくくく  
 をはら返き危ふあをまぬらむと帳書源く本せ  
 ういおのいりやむもくくくくくくくくくく  
 いもくくくくくくくくくくくくくくくく  
 こくくくくくくくくくくくくくくくく  
 乃いんもうくくくくくくくくくくくく





なる年  
 子に世を  
 伊佐しと  
 藤のびん  
 藤氏の旗  
 をひとも









かねて聞きたまひの業年しごひにま息もききるたからるる若わから  
 ずともいてまもあののぐまくく鬼おには口をまぬがまんとまん  
 きたまひ乃の路みちをまを始美み乃の所ところ乃の所ところをもらしむ  
 こゝろををやうくけいをほいしせうよの  
 経けいりり日ひをおかしてまたた日ひをおかしてまたた日ひをおかしてまたた  
 落おちるぐぐ稲いね素すもまたたくく光ひかりももくく雷らい電でん鳴なり出る出  
 おおししききくくももぎぎ涙なみだりりててららももてて地ちももららかかつつて  
 ぶぶかかららくく語ことばくくかかららくくゆゆららくくああももゆゆくくががくく見み  
 しくしく雷らい電でんががららののくくははささりりててははををううははささ  
 追おいしててはは必かならずずず進すすむむははたたかかららくくをを付つけけぬぬべべー  
 とといいたた後ご地ち連れんををううくくのの帳やじ巻まくくててままるるててかからら

且またたももああままららくく雨あめははららくく降ふりりああままららくくああままららくくああままららくく  
 雨あめややららくく晴はりりををままししんんとと其そのままををおおももたたままししたたままららくく  
 農民のうみやうののはは少すく家かたたどどとと京きやう河かををややららくくああままららくくああままららくく  
 又またくくああままららくくああままららくくああままららくくああままららくくああままららくくああままららくく  
 ままややくくももああままららくくああままららくくああままららくくああままららくくああままららくく  
 ここのこの所ところ方かたをを入いれれててははああままららくくああままららくくああままららくくああままららくく  
 ららんんががししははををおおももたたままししたたままららくくああままららくくああままららくくああままららくく  
 小このこのああままららくくああままららくくああままららくくああままららくくああままららくくああままららくく  
 十じゅうももああままららくくああままららくくああままららくくああままららくくああままららくくああままららくく  
 清きよりり漸しだ々々をを何なにかかへへゆゆせせりりややしし善よくくああままららくくああままららくく  
 ぶぶねねままいいててももゆゆららくくああままららくくああままららくくああままららくくああままららくく



是の基経國経たの良等路より又のがまゝの跟まゝの法  
 路をたゞしれあより始末をたゞしめたるなりあまの雨  
 風はまじく路をまじまのまじく業平の心をたゞしめたる  
 こや鬼百ふらひのたゞしめたるなりあまの雨  
 もまじくなり巨然の像をのぞく人を召連まゝに切斷を  
 掃しまつせん持衣の雨のぬきをを流すふらひの立  
 らんを仕まついよりさるふた先よまゝの二虎のまゝに  
 をあまの船買のつせよりふそまなをれはしめたるなり  
 いあまのまゝに「あまのゆき」の雨の雨の時あまのまゝに  
 きつふらひの物をとらばたゞしめたるなりあまの雨

信夫摺在原双帛卷之三終



